カタカムナ学会誌　学術シンポジウム特別号

試し読み

PDFダウンロード版　/　制作中の誌面から

当日の言葉と対話を、文章・写真・資料で読み返す。

本誌の読み心地をご覧いただくため、制作中の誌面から

13ページを抜粋しました。

収録した誌面

表紙・序・目次

第一講演　p.23　/　第二講演　p.30–31

第三講演　p.65–66　/　第四講演　p.89

パネルディスカッション　p.111–112

補足資料　p.132　/　講演横断索引　p.144

ページ番号は本誌の誌面番号です。抜粋のため、

前後の文章・注記・参照先を省略している箇所があります。

本文は本誌の誌面をそのまま収録しています。

最終版では内容やページ構成が変わる場合があります。

本ファイルは全冊版ではありません。

カタカムナ学会

カタカムナ学会誌

学術シンポジウム特別号

カタカムナとは何か!?

八十首解読から見えた全貌公開!!



2026年9月6日
明治記念館「鳳凰の間」
カタカムナ学会

序｜この記録を編むにあたって

2026年9月6日、明治記念館「鳳凰の間」にて、カタカムナ学会 学術シンポジウムを開催しました。

この日、四名の登壇者が、それぞれ異なる立場と経験から「カタカムナとは何か」という問いに向き合いました。四つの講演に続くパネルディスカッションでは、参加者から寄せられた問いを通して、それぞれの視点が再び交わりました。

本誌は、そこで語られた言葉と交わされた対話、そして参加者に生まれた理解や問いを、後からたどるための記録です。

講演の記録では、それぞれの話がどこから始まり、どのように展開し、何を問いとして残したのかを大切にしています。先に語られた言葉が、後の話によって別の意味を持つこともあります。その経緯を保ち、読者も話の展開に沿って考えを進められる誌面を目指しました。

参加者のアンケートや当日記録には、つながりを感じた言葉、日常へ持ち帰りたいこと、理解しきれなかったこと、疑問や違和感も残されています。本誌では、それらを個々の受け取りとして紹介します。何が語られたかとともに、それがどのように受け取られたかも、この一日を伝える記録の一部です。

編集にあたっては、当日の発言・資料、後日共有された補足資料、編集による要約・整理・注記を区別して扱います。出典や関連資料は、読者が言葉の背景を確かめ、講演と資料を行き来するための手がかりとして示します。

記録することは、答えを固定することではありません。

誰が何を語り、何が交わされ、どこに違いがあり、何がなお問いとして残ったのか。その輪郭を残すことが、次の研究と対話へつながっていくと考えています。

当日参加された方には、あの一日をあらためてたどるために。参加されなかった方には、講演と対話に触れ、自ら考えるために。本誌が、2026年9月6日の記録を次へ手渡し、「カタカムナとは何か」を考える一つの入口となれば幸いです。

目次

序　この記録を編むにあたって 1

第1章　2026年9月6日 学術シンポジウム開催記録 3

第2章　四つの講演記録..... 10

第一講演　やましたひでこ 11
断捨離®とカタカムナ

第二講演　天聞 27
カタカムナとは何か
――八十首を貫く宇宙生成文法と言灵・神世七代・密教に共通する構造

第三講演　武田崇元..... 57
カタカムナとちいかわ

第四講演　さえぐさ誠..... 77
小さな“大日本史”～縄文前史と現代史～

第3章　四つの視点が交差するパネルディスカッション 107

第4章　補足資料・参考文献..... 131

第5章　参加者の受け取りと残された問い 148

記録写真　あの日の場面から 167

編集後記..... 168

奥付 170

8｜日常という部分に、人生全体が現れる

人生を一つの全体と捉えるなら、日常の営みはその部分にあたる。ただし、その部分は、人生全体から切り離された小さな一片ではない。

日常のあり方が人生全体に関わり、同時に、人生全体が日常の中に現れている。やました先生は、部分と全体の関係を、自身の断捨離の実践に重ねた。

「日常の営みが人生全体に大きく影響する」

先生はそれに続けて、人生全体が、この日常に現れているとも語っている。

この視点を持つことで、住空間に身を置いたとき、そこに暮らす人が今どのような状態にあり、人生のどこに立っているのかが、見えてくるようになった。

「ヒトツカタ」に触れたとき、こうしたことをカタカムナも教えてくれているのだと感じた。

先生は「フラクタル」という言葉にも重ね、ますます学びにひかれていったと振り返る。

さえぐさ先生は、整体と合氣道にも携わっていた。

カタカムナを学ぶことで、気という見えない世界も、この部分と全体の関係から読み解けるのではないか。

その期待もまた、学びを続ける力になった。

2｜「結論から言うと」

その「あれ？」に続けて、先生は答えを先に示した。

「まあ結論から言うとですね。もう長ったらしく言うんじゃなくて、結論から言うと、カタカムナとは何か。」

先生がまず指したのは、講演中に「ヤタノカガミ」と呼んだカタカムナの中心図象〔注1〕と、仏教の法輪だった。



当日投影された、80首・法輪・曼荼羅に共通する構造を示す資料。

「同じ形なんですよ。偶然同じ形なのか？　偶然じゃないんですよね。」

先生は、胎蔵界曼荼羅や種字曼荼羅にも同じ形を見いだし、外に現れた図形が似ているのは、その基にある構造が共通しているからだと説明した。

「講演会、これで終わってもいいぐらいの答えなんです。」

そして、「カタカムナとは何か」への答えをこう語った。

「カタカムナっていうのはね、十一面観音の顔を持ってる。」

先生は、東寺の十一面観音や、十一面観音の化身として挙げた天道法師の話から、その意味を説明した。

「一つの真理から十の姿を表す。これが十一面観音の構造なんですよ。一つの真理がいろんな顔になる。」

ここで先生は、天道法師、荷田龍頭太、稗田阿礼、仁聞菩薩の名を挙げた。

「全部同じ人物じゃないかって言ってるんです。」

さらに、

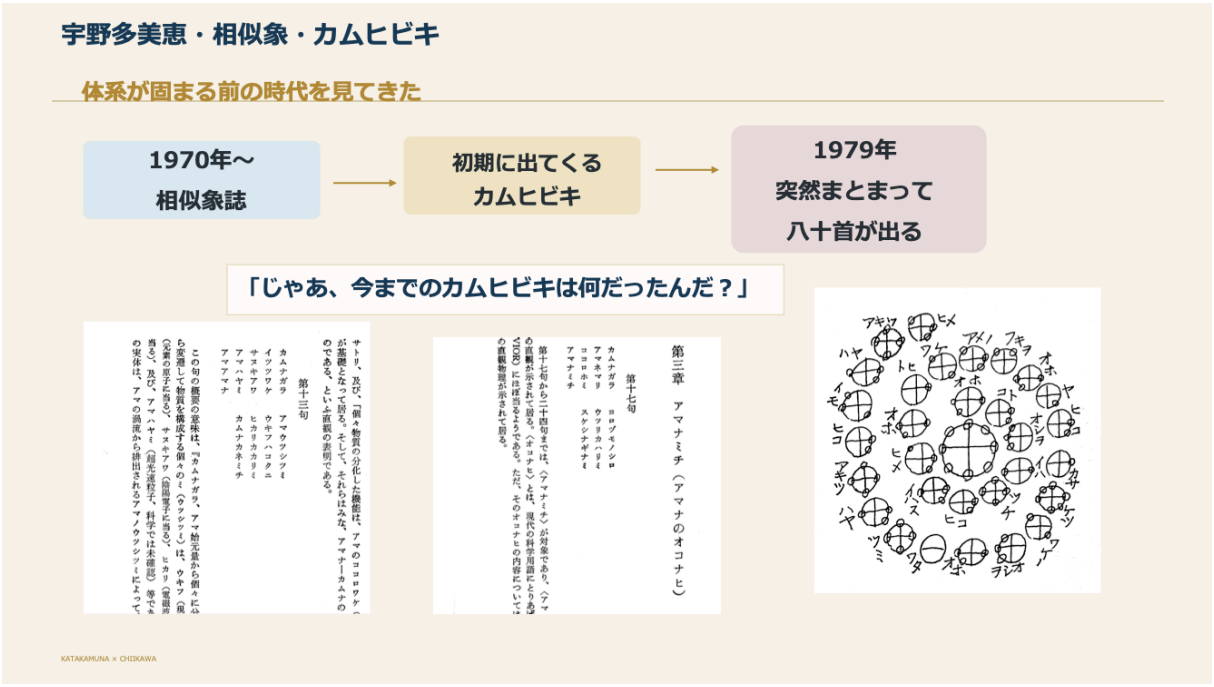
「とんでも論なんですよ。年代もおかしいし。」

と付け加えた。

年代上の矛盾を承知したうえで、先生は、自身の解読ではこの四者を同一の存在として結びつけていると語った。

ここから先生は80首全体の話へ戻り、80首を貫く一つの理が、農法、製鉄、商売など、異なる姿となって現れると説明した。

「だからカタカムナから農法が出たり、製鉄が出たり、商売が出たり、いろんなカタカムナがあっていいんですね。」



「相似象」誌初期のカムヒビキから1979年の八十首へ至る流れ。
武田先生の講演資料より。

5｜資料不足から、解釈過多へ

武田先生は1970年代を、

「資料がないから断片を拾って関係性を探していった」

時代として振り返る。

それに対して2010年代には、

「今度はもう解釈が山のように多すぎる」

状態になった。

「資料不足から解釈過多へ」

かつては、資料が少なすぎた。今度は、解釈が多すぎる。

武田先生は、そこで次の問いを置いた。

「この断片と断片をね、どういう原理で結ぶのかっていうことね。」

そして、その問いに続けて天聞先生の名前を挙げる。

「ここではその読みの文法ということを言い出したのがあの天聞先生なのね。」

カタカムナから遠ざかっていた武田先生のもとへ、ある日、天聞先生が原稿を持って現れた。

そこで武田先生が「なるほど」と感じたのが、「読みの文法」に力点を置いていることだった。

6｜「感覚」から「文法」へ

ここから、講演は山口志道、江戸期の言霊学、『水穂伝』へと遡っていく。

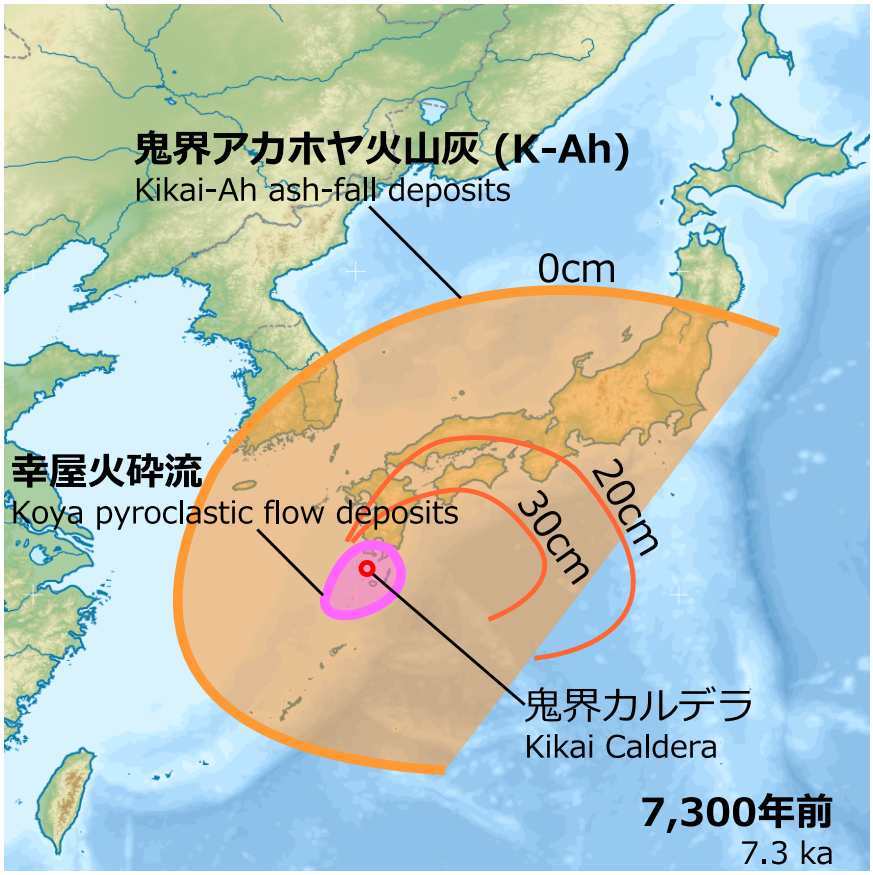
武田先生は、自らを含む古神道系の人々も、カタカムナや相似象の中に、山口志道、大石凝真素美、天津金木などに通じるものを「感触的」には感じていたと振り返った。

だが、天聞先生の仕事に見たのは、そこからさらに踏み込む姿勢だった。

9｜アカホヤの大噴火と二つの天孫降臨

ここで、時代は約7300年前へ戻る。〔注7〕

さえぐさ先生が取り上げたのは、鬼界カルデラで起きたアカホヤ噴火だった。



幸屋火砕流と鬼界アカホヤの広がり。九州南部・東部、四国、本州瀬戸内海沿い、および和歌山県で20cm以上あり、広くは朝鮮半島南部や東北地方にも分布する。

鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）の広域テフラ分布図
Hugo Lopez (Yug), modified by Pekachu, “Kikai K-Ah tephra 7,3ka.svg,” Wikimedia Commons, CC BY-SA 3.0.

2｜仮の姿はどう変わるのか

天聞先生が補足を促すと、やました先生は、そもそも「空・仮・中」はどういう漢字を書くのか、分からない人もいるのではないかと問い返した。実は自分もそうだった、と言葉の入口へ戻る。

武田先生が天台宗の「三諦（さんだい）」に触れると、天聞先生は、三つの漢字を示して説明した。

「空（くう）っていうのは空気の空ですよね。色即是空（しきそくぜくう）の空。で、仮（げ）っていうのは仮なんですよ。仮免の仮。中（ちゅう）は中なんですよ。」

武田先生は、不幸なこともよいことも含め、自分たちの身の回りの現象界を「仮」と捉える説明を添えた。

天聞先生は、現象界のすべてを「色（しき）」と呼び、それが「仮」に当たると続けた。さらに「中」を、空と仮の両方を司る「正中（まなか）」として説明し、そこで自分が順応していくことを語った。

そこから話は、「仮」の読みと「化ける」をめぐるやり取りへ進む。

「だから実はどんどん化けていくんだと。」

目の前に起きていることも、これからどのように化けていくのか。

その変化の中に真理の構造が隠れていると考えると、ぞくぞくするような感覚がある。やました先生は、今起きていることの見方が変わる面白さを語った。

「この構造を絵に表してるのは鯉の滝登りなんです。」

天聞先生は、逆流を力にして上る鯉の姿に、その構造を重ねた。会場にある鯉の図柄にも話が及ぶ。

さらに、『言霊秘書』にも鯉が登場し、山口志道が鯉を描いて春日神社に奉納したという話を紹介した。逆流をエネルギーにして上る姿に、空・仮・中の構造も当てはまると読む。

やました先生は、逆流に出会った時、それをエネルギーに変えられると思えば素晴らしい、と応じた。

やました先生はさらに、さえぐさ先生がこの4人を「みんな怒るタイプ」と評したことを紹介した。そして4人に共通するのは、怒りをパワーに変え、推進力にすることだと語り、これも空・仮・中だと天聞先生に呼びかけた。

武田先生も、自分には金銭的な余裕がないまま、今もやるべきことが残っているという実感を重ねた。自分にお金があれば寝ているだろう。それでも生かされ、何かをやらされているように感じると語った。

本章では、四つの講演とパネルディスカッションに登場した図象・名称・研究資料・関連文献を、本文理解の補助となる範囲で紹介する。

1｜図象と名称を確かめる

三つの中心図象

第二講演で天聞先生は、カカミ・印のミタマ・ツルキという三つの中心図象を、水・正中・火の三構造として説明した。ここでは、講演後に共有された資料から、その図象と名称を確認する。



三つの中心図象。左から、カカミ、印のミタマ、ツルキ。

出典：天聞「中心図象の正本解読」
（参加者への後日共有資料）より一部抜粋。

第1節全体に関連する講演・パネル

中心図象と名称：第二講演 第3節

布斗麻邇御灵と探究の経緯：第三講演 第8節

5｜講演横断索引

関心のある語やテーマから、講演・パネルの該当箇所を読み返すための索引である。各講師がどのような経験や文脈から語っているかにも目を向け、発言のつながりと違いをたどっていただきたい。

語・テーマ	関連する講演・パネル
中心図象と名称	第二講演 第3節
布斗麻邇御灵と山口志道	第三講演 第6・8節
資料公開・研究と交流の歩み	第三講演 第4〜5・10節／第四講演 第4〜5節
断片・部分・全体	第一講演 第7〜8節／第三講演 第3〜5・9節／パネル 第4・6節
生成・循環・原点回帰	第二講演 第3・10節／第三講演 第6〜9節／パネル 第1・12節
働きと実体	第二講演 第9節／パネル 第1〜2節
「間」と関係	第一講演 第10節／パネル 第8〜12節
日常の実践と身体感覚	第一講演 第3・6〜8節／パネル 第7〜9節

※節番号は、各講演およびパネルディスカッション内の番号を示す。参照先は主な箇所に絞っている。